



長谷寺かわら版

百日紅

99号

2018 (平成30) 年
8月1日

ねはんず

涅槃図の退院

☆前説

昨年、長谷寺に伝わる涅槃図の修理作業に取り組みました。一年半をかけたこの作業がようやく終わり、無数の傷を治してもらって、この春、無事寺に戻つ

涅槃図修復報告会次第

- 一、おつとめ
- 一、代表総代挨拶
- 一、感謝状授与
- 一、経過報告
- 一、長谷寺涅槃図の特徴など
高橋平明 元興寺文化財研究所
- 一、涅槃図の修理について
文化財修理の考え方
吉岡宏・横堀篤代 文化財保存
- 一、絵解き 小林玲子 長野郷土史研究会



少し長丁場になります。ご用のある方、お疲れの方は、遠慮なく中座して下さい。

てきました。

さっそく総代会を開き、浄財をお寄せ下さった檀家さんすべてに案内を送り、梅雨入り直後の5月31日、帰還報告会をもちました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、そのせいかそのおかげか、話を聞くには最適な人数が本堂に集い、とても充実した報告会になりました。

というわけで、ご参加願えなかった方も少なかつたので、今回は、この報告会の報告号です、

☆前座

まずは本尊に、涅槃図が修理を終え無事に帰って来



たことを感謝する、おつとめ。参加者全員で、いつもの般若心経を唱えました。

代表総代の古川市郎さんの挨拶に続き、長く総代の代表総代の重職をつとめて下さった斉田の河野保夫さんに、感謝状と記念品をお渡ししました。河野さんは

総代として実に40年以上、代表総代として30年近くも寺のために力を尽くして下さいました。

私からこの事業の簡単な経過



われらが河野さん。長いことお世話になりました。

報告をしてから、はるばる遠方からお越しいただいた四人の講師さんたちから、涅槃図をめぐる三本のお話をいただきました。

お話の全体を記すわけにもいきませんから、いくつかのポイントに絞り、私の言葉に翻訳し、解説を加えながら紹介します。

☆真打ち

▽涅槃図と涅槃図の話

まず、奈良の元興寺文化財研究所の高橋平明さんから、報告をいただきました。元興寺は日本最古の寺のひとつで、運営する文化財研究所は、民間では屈指の研究施設です。高橋さんは、うちの涅槃図の文化財的価値に初めて着目して下さった方で、ことに涅槃図に



元興寺の高橋さん。このプロジェクトの最大の功労者です。

関しての造詣が深く、今回の修理は、氏の助言、提言によるものでした。

涅槃図は、釈迦の入滅のシーンを描いたものですが、本場のインドで生まれたわけではありません。そもそも涅槃図という法要も、始まったのは中国だったようです。

ですからその法要の本尊である涅槃図も中国生まれ。どうやら唐の時代に生まれたらしいことが、女性の着衣、髪型や顔かたちか





天から駆けつけた、釈迦のママの摩耶夫人。
唐風のスタイルです。

た長谷寺が、再建された時代です。戦乱の時代が終わり、蜂須賀氏による阿波の支配がはじまります。その中で長谷寺も再建・復興の歩みを始めます。この復興事業の中で描かれたものだったのかも知れません。

▽修理の現場から

実際の修理に当たってくられたのは、こちらも奈良にある(株)文化財保存。このちよつと変わった名前の会社は、奈良国立博物館の一画にも工房を構える、本格的な文化財修理の会社で、

わが長谷寺の涅槃図は、四枚の絹を縫い合わせた大きなキャンバスに、描き装で全体を描いてあり、大変な経費と手間がかかっていることが分かります。制作されたのは、17世紀初頭、江戸時代のはじめころのもらしいです。

17世紀初頭といえ、戦国時代の土佐の長曾我部氏の侵攻で伽藍が灰燼に帰し

は、いつでも修理前の状態に戻せるような修理を施しておくということなのです。が、ちよつと分かりにくいですね。

長い年月を経た文化財は、幾度か修理が施されており、しかも今回が最後の修理というわけでもありません。今後さらに修理は続くわけです。うちの涅槃図にも幾度かの修理の跡が見られました。

それが50年先か100年先のことになるのか。いずれにしろ、次の修理がやりやすいような処置を施しておく



本堂に大きなスクリーンを設えて、吉岡さんによる解説。



肌裏紙の除去。1日に15cm角くらいしか進まないことも。

という意味です。

絹に描かれた絵には、強度を保つため、裏から数枚の紙が貼ってあります。これが裏打紙です。このうち、絵に接している肌裏紙の除去は、絵を傷つけないように、ピンセットを使って少しずつ慎重に進めます。そして必要な修理を施して、終われば再び裏打紙を貼り重ね、補彩をします。

この時に使う糊は、化学糊でなく、小麦粉の澱粉で作った糊です。次の修理で安全に裏打紙を取り外せるようにするためです。今回は都合6層の裏打ちを行い

ましたが、これを貼るのに作りたての新糊と時間をかけて作った古糊を使い分けます。こうすることによって、作品に強度とともに柔軟性を与えることができます。作品に優しい古糊は、拵えるのになんと10年もの時間をかけるといいます。まさにプロの仕事です。

次にオリジナルの尊重。これは現状を維持するということ、ここでいう現状とは、長い時代を経て伝えられた現在の状態を維持することに他なりません。決して制作当初の状態にまで戻すわけではありません。



作業チーフの横堀さん。とても分かりやすい報告でした。



成形した補絹を欠落した部分にあてがいます。

同じ形に成形する必要がありません。これは、実際に目の当たりにすると、驚くほど細かい作業です。

そして、この補った絹の上には、決して絵を描かない。これも現状維持の鉄則です。ただ、補絹の生地（きじ）のままというわけにもいかない。ので、絵全体に影響がないような、目立たない色調の色だけを塗ります。

最後が、調査と記録。絵がどんな状態なのかをしつかり調査し、どんな修理を施したのかをきちんと記録に残します。

この欠落部分には、新たに絹を補うわけですが、その絹は、残った古い絹と馴染（なじ）むように、電子線を照射して強制的に約400年分ほど劣化（ろうか）させ、オリジナルと同じような状態になった絹を使います。しかもこの補絹（ほきん）は元の絹地と重ならないよう、欠損部分と全く



補絹の部分に補彩をします。



報告書とCD。データはこの紙面作りにも役立ちました。

修理を終えた涅槃図の納品に際し、詳しい報告書とデータを記録したCDが添えられ、除去した裏打紙や軸を巻いていた紐まで返却されました。次の修理のときの参考にするためです。いわばこれらは、涅槃図とともに後世に保管し伝えなければならぬ、寺宝のかけがえのない付属物ということになります。

しかし、涅槃図そのものだけでなく、こういう記録を100年以上も失わずに残しておくのは、実はそうたやすいことではありません。大変な宿題を課されて

しまったと思います。

文化財の修理がどのように行われているのかについては、世間ではあまり知られていません。描かれた絵、完成した作品を目にすることはあっても、その制作過程までは、見せないし、また見えないものです。とくに、修理などという地味な仕事は、めったに注目されることはありません。たとえ国宝級のものでも、修理が始まる、あるいは完成したという場面はニュースになっても、その間の修理の実態まで注目されることは

ありません。

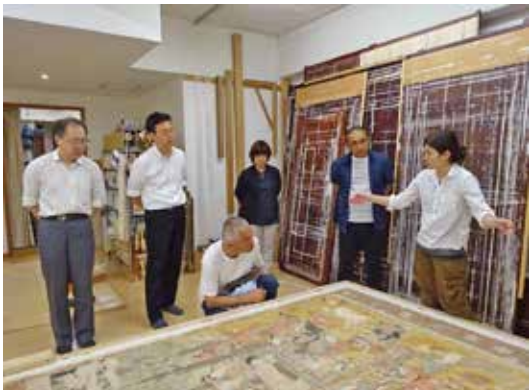
今回の修理の期間中、二度ほど、修理の現場を見学させてもらい、その手厚さ、緻密さに驚き、また感心しました。ぜひその一端をみなさんにも知ってもらいたいと思います、今回の報告をお願いしました。そのときの驚きと感動を、少しはご理解いただけたでしょうか。

▽絵解き

トリは、長野の小林玲子さんに涅槃図の絵解きをお願いしました。

報告会ではぜひ絵解きを聞いてもらいたい、それまでできれば名人のものを、と考えていました。

鳴門結衆では、涅槃図の絵解きをする寺がありますが、おもにお参りするのは当番寺院の檀家さんです。うち、うちの檀家さんで絵解きを聞いたことがある人は少ないはず。うちの坊主は、絵解き、やりませんから。



修理作業の現場見学。驚きの連続でした。



どこかにいい人はいないかしらと探してみても、出会ったのが小林さんでした。さっそくネットでDVDを手に入れ、じっくり拝見し、この人ならとお願いの便りを書いて、ご快諾いただきました。

絵解きは、涅槃図に描かれた人、動物、物や、シーンそのものを解説すること、仏の教えを分かりやすく説いたものです。いわば絵解きは、説法でもあるわけです。

長野といえば善光寺で



長野からお招きした、絵解きの小林玲子さん。

す。かつては善光寺聖たちが全国で善光寺如来絵伝の絵解きを行い、信仰を広めました。衰退してしまっていたこの善光寺の絵解きを、ご夫君の一郎氏とともに復活させ、さらに涅槃図や、その他さまざまな仏画の絵解きもされるようになりました。

絵を傷つけないよう先端に鳥の羽の付いた「お羽指し」と呼ばれる指示棒を片手に、それはそれは見事な絵解きをしていただき、参加者たちも大喜びでした。

ところで、絵解きは「語り」そのものですから、読むものではなく聞くものです。ここでその内容を文字にするとは、歌を聞かせずに、メロディ抜きの詞だけを読んでもらうことと同じで、あまり意味があるとは思えません。これだけは、当日参加された方だけの役得とお諦め下さい。

結果の涅槃会でも、今後

も絵解きが行われる機会はあるはずですから、興味のある向きは、ぜひご参加ください。

☆かぶりつき

ひどく小難しい話になってしまいました。なにより現物をご覧いただくのが一番ですね。頁全体を使って写真に掲載しました。2頁が修理前、5頁が修理後。一見、どこが変わったのだろうと感ずるかもしれませんが、その点こそがまさに文化財の修理の正しいあり方なんです。

全体に折れや亀裂が入っています。折れは、両端を見れば一目瞭然ですね。絵が燃れて、ひどく波立っています。巻いたり開いたりを繰り返すと必然的に生じる、いわば軸の宿命です。



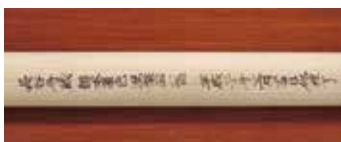
軸首もご覧の通り。



これが見事に治っています。



収納は、絵が傷みにくい太巻にしました。



修理の記録は軸にも残っていますが、絵が巻き込んであるので、次の修復の時しか見られません。

横に白く無数の輝が入っています。これが亀裂で、絹地が劣化して欠損し、絵そのものが失われていきます。ここに新たに絹を補い、淡い茶色のみで補彩しました。満月の上の表装の部分に、絵が大きく欠落した箇所がありますね。この変化を見れば、分かりやすいです。

▽

△

次にこの涅槃図を公開するのは、次回の長谷寺の涅槃会。11年後の2029年です。ただ、近年になって、うちの仏像や仏画、古文書などの什物（寺の宝物）たちが、にわかに注目され始め

ました。この報告会が新聞でも報道されたせいなのか、県の教育委員会も急遽調査にやってきました。本尊の観音さんの本格調査も予定されています。これらの調査の結果も、ここでお知らせできればいいです。

また徳島県立文書館では、8月7日から「長谷寺の古文書」展が開催されます。ここでも、修復された涅槃図の写真が展示されることになっています。

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1

電話 088-686-2450
ファクス 088-686-2130

E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp

URL
http://www.chokokuji.jp/

長谷寺
編集 祐信